

レヴィナスの平和論

—— 秩序とその改革への道程をめぐる ——

岩井美好

はじめに

エマニエル・レヴィナスは、戦争も平和も、利害関係を基軸とする同一平面上にあるものだと考えている。闘いも共存も、対峙する者同士の保身と利益をめぐる展開される、攻防の結果にすぎないからだ。このように権力配分への志向という、いずれ変わらぬ動機に則っているとはいえ、成功した駆け引きの賜物である平和のほうが望ましいことはいうまでもない⁽¹⁾。では、こうした交渉と妥協の所産ともいえる秩序とその安定は、どのような過程を経て勝ち取られるものだとレヴィナスは唱えているのだろうか。

本論考では、真に公平な制度によって支えられた平和を維持するために不可欠とされた、「身代わり」という契機について検討していく。そしてレヴィナスと同様に「身代わり」をテーマとしながらも、それが良心としての自己犠牲ではなく、他者を生贄とする現実のメカニズムに光を当てることによって、従来人間社会が実行してきた争いの浄化装置を告発するルネ・ジラルルの説を取り上げる。両者の比較を通して、「犠牲」とは実のところ、確固たる根拠に基づいた「敵」によってもたらされるものではないことが明らかとなるであろう——敵意とは、その発生源が特定の人物

(1) Cf. AE pp. 15-16.

に由来するのではなく、共生に伴うフラストレーションや降りかかる災厄の原因を求めて、憎しみの恰好なる捌け口が見いだされるところから湧き起こってくるのだという。

そうした敵意の注がれる標的が、みずからの側に属する者であった場合「犠牲者」と呼ばれ、逆にみずから自身その迫害に関与した側ならば端的に「敵」と呼ばれることになる。このように闘争をめぐる「敵」とは、たとえそこに何ら実質的な被害を伴わずとも⁽²⁾自分たちこそが犠牲者だと見なす側によって容易に創出されうる観念なのだ。共同体内部で自然に醸成されてくる敵意のこうした無根拠性を自覚せぬままなら、今後もその解消を求めては外部に「敵」をスカウトし彼らの殲滅を狙う、といった戦闘行為が止むことはないであろうとジラールは憂慮する——そしてこんにちまさに国際政治の舞台でアメリカが体現しているのが、この「敵と味方の二分法」に従った「無法国家」の制圧なのである。

米軍の圧倒的な力を背景に成り立っている冷戦後の国際関係は、こうしてスケープゴートに敵意を集中させることによって支配下陣営の統一を図り、みずからの意に沿った権力分布を叶えようとする米国の思惑で制御されている。ソ連の崩壊によって相互抑止の縛りから解かれ、米国にとっての武力の制約が取り払われた現在、軍事力を度外視した平和という状態を想定するのは一層困難になってきた——このような実情を踏まえたうえで、なおかつ武力に可能な限り訴えずに平和を構築する可能性を探るのが、国際政治におけるリアリズムの提唱者、藤原帰一である。平和が戦力を前提とした、せめぎ合う国益の協調の賜物だとする藤原の所見は、レヴィナスの説に近似している。藤原の議論よって権力闘争の現場を瞥見しつつ、平和というこの危うい結束関係をより安定したものとするために、レヴィナ

(2) イラク攻撃に関しては、米国側のみずからが9.11の犠牲者だという大義名分はもはや通用しない。「テロとの闘い」というそれは口実に過ぎず、しかもこうした口実を根拠として、大量破壊兵器を有すると想定された「敵」の撲滅に乗り込んだのであった。

スの提言はいかなる有効性を発揮しうるのか、その射程を問うのが本稿の目的である。

1. 体制と個人の関係について——レヴィナスの場合——

(1) 社会制度に温存される暴力とその還元の可能性

一口に「紛争」といっても、国家間のそれなのか内乱なのかで事情が異なるところがある。市民戦争ならば、社会の成員による合意のもと作られたはずの法に政府が著しく違反した場合、再び対立勢力間の闘争を経て新政府の設置に漕ぎ着けることが原理的に可能である——そしてこの体制下で公布された法には、政府・人民ともに従う義務がある。ところが、互いに国益を主張してやまない主権国家の間には、それらの上位に立ってそれぞれに対し共通の法執行を強制しうる国際的統一政府は存在しない。万国が従う義務のある法体制が整っていない以上、同盟や条約や各種の協力機構などにより辛うじて支えられている国際関係は、かくして戦争の火種を抱えていることに関して、国内政治の比ではない。

レヴィナスが「戦」について言及する際、それは大概内戦にあてはまる論述だと思われる。しかしナチスに侵蝕された時代のヨーロッパにユダヤ人として生きた⁽³⁾レヴィナスが、任意の一国家の政治体制のみを念頭に置いて平和をめぐる持論を展開していたというのも考え難い——「私たち西欧人にとって真の問題とは……暴力に抗する闘いについて検討していただくことであって……しかもこの闘いそれ自体に発する暴力が、制度として根付かずに済まされるか、ということについて問うてみなければならない(AE/271)」とレヴィナスが言う時、そこで訴えかけられているのはやはり彼自身を取り巻く世界の人々であり、国境を越えて彼らと手を携えつつ国家共同体の健全なあり方を模索していると見做すのが妥当であろう。

(3) 1906年リトアニア生まれのユダヤ人であるレヴィナスは、フランスのストラスブール大学とドイツのフライブルク大学に学び1930年にフランスに帰化、第二次大戦中はナチスの捕虜収容所で囚われの身であった。

このようにレヴィナスにおける戦争と平和に関しての考察は、国内政治・国際政治いずれに該当することなのか曖昧さを残すところがある。従ってさしあたり、対立陣営を国家同士とするマクロな視点からではなく、一国内で権力闘争が繰り返されていく様から彼の考え方を繙いていくことにする。国際政治については、こうした党派争いが敷衍されたアナロジーのもと解釈されていると見て差支えないだろう⁽⁴⁾。

対抗する諸勢力の相争う状態が沈静化され、社会が落ち着きを取り戻すためには、支配権のありかや権限の及ぶ範囲、そして福利厚生の様態などを定めた法や制度が欠かせない。こうしてひとまずそれぞれの立場にある者たちにとって折り合いのつけられる社会基盤が整ったとしても、それが公正な制度と呼ばれうるには、なおも取り残された人々への目配りが常に行き届いていなければならない——そしてレヴィナスの議論の眼目は、恵まれない者たちに対するこの配慮を、いかにして枯らさずにおくかというところにある。

一見滞りなく営まれている社会機構も、長く幅を利かせるうちには必ず、時代に適合しない歪みを生じるものだ。つまり法や組織が制定された時点では予期しえなかった階層の出現や力関係の変化などには、旧態依然とした制度は対応しきれなくなってくる。しかし社会の構造を組み替えるのは骨が折れることだ。そこかしこで起こること必至の抵抗と対立を調停して、その都度新しい事態に対処できるよう取りはからうよりもむしろ、とりあえず無難に収まっている今の制度に固執するほうが社会の「平和」に寄与するのではないか——現在の体制の仕組みによって特に不利益を被っているわけではない大部分の層の人間は、こうして、改革に向けて事を荒立てるよりも事なかれの「平和」に安住することを選ぶ。たとえそこに、現行の法や制度の保護に与ることのできない層が伴っようとも。

(4) 例えば「戦争と帝国の全体性 (TI/8)」などという表現では、闘いが一国内のことを指しているわけではないことが含意されている。

平穏無事に治められているかのような世も、かくして、硬直した制度の適用外となる人々を抱え込んでいる。秩序の安定とは、そうした者たちが耐え忍ぶ不公平を顧みないうで持ちこたえているものなのだ——そういう意味では、「平和」な社会にも不満分子の押さえ込みという暴力的な要素が常に働いている。このようにおよそ不正を免れない、組織というものの総体を、レヴィナスは次のように表現する——それは「……均衡を保ち、法律によって管理され、ひとつの権力に従属し、ひとつの秩序、ひとつの『国家』、ひとつの都市、ひとつの民族、ひとつの職業集団を構成するような (DD/26)」社会である、と。

いずれかの層の人間に皺寄せを与えずにはいない、この「平和」というものが、かくの如き緊張した関係の産物ならば、レヴィナスがそれを争い同一線上に置いたとしても不思議ではない——この虐げられた面々が、いつ社会の安寧秩序に対して捨て身の反逆に打って出ないとも限らないからだ。争いの因子を宿しながらも当面の社会的連帯は機能しているというこの現実が、平和と戦争の危うい表裏一体性を物語っている。

しかしこのように不利な立場にある者たちが暴動を起こしたところで、結局は反撃の応酬の糸口を開くばかりである。それゆえレヴィナスは、公正なる制度によって裏打ちされた真の和平を獲得するための手段として、弱者による秩序の転覆などを奨励しているわけではない。すでに先の引用で触れたように、暴力に抗した闘争はむしろ暴力の常態化を招くに過ぎないからだ。しかもこうして打ち立てられた新秩序は、またしても必然的に不正を秘めている——従って「……その『別の社会』が据えられるや否や、再び反逆が始まる。秩序が据えられるや否や、再び不正が根を下ろすものであるから、ただちにそれに対する反逆が始まるのである (DD/27)」。

こうした見解を抱くレヴィナスは、社会を存立せしめている骨組みの破壊、ではなくその見直しを迫る契機として、なお人間性に期待を寄せているのだ。それは「苦しむ他人の顔」に思わず心乱れる個々の人間に懸かっている。みずからが帰属する組織の破れ目に覗く、異質なる者の存在に目

覚めた瞬間、平和という名の秩序を洗い直し、その頑なな支配機構に風穴を開ける必要性が痛感されるのである——そしてこのようにして引き起こされる「革命意識（DD/63）」こそが、こんにちまで世直しを駆り立ててきた原動力であった。

(2)無関心を打ち破る〈顔〉——平和の歪みを是正する転回点——

かくして組織というものは、たとえどんなに良心的な目的をもって創始されようとも、一旦確立されたら最後、時代錯誤な部分を残し、各成員に何らかの圧力を加えずにはいない、ということが明らかとなった。しかし同一の法のもとで治められるからといって、個々の者が一様なる影響を受けるわけではない——そこには恩恵を被る側と不利益を被る側の双方が、必ずや生み出される。従って少しでもおのれの立場にとって有利な条件を獲得すべく、それぞれが権利を声高に唱えつつ拮抗している状態が生ける社会の実情であった。

こうした緊密な競合関係によって編成された共同体は、その秩序が根本から乱されることなく統一を保っているかぎりにおいて、まずは平和な社会と呼ばれうる——対抗する者たちのあいだでは、諸々の勢力を何はともあれ一つに纏めあげるこの体制を尊重しなければならないという暗黙の了解が働いているので、暴力的な手段ではなく交渉によって合意に達する心構えが共有されているからだ。そういう意味では、「平和」という状態には遍く「理性」の力が行き渡っているといえるだろう。

不和の種を抱えながらも、最終的にはあたかもひとつの精神を有するかのような有機体に組み込まれることを望む、これら話し合いを求める人々をしてレヴィナスは次のように言う——「同一の思惟のなかに収まった無数の意識の統一性、それを社会性と呼ぶことも可能である。が、そこからは対話者たちの相互的な他者性は排除されている。これがいわゆる、暴力を停止するため請われた対話なるものである——それは対話者たちを理性のうちに集結させ、満場一致によって平和を樹立し、合致に向かって近親

性を消し去るのである。これは西欧型ヒューマンイズムのとりわけ好む方法である（DD/216-217）。

このように予定調和のもと組織の統一体に収斂されていく個々の人間は、談合や説得のすえ、矛を納めてみずからの分をわきまえつつ生きていくことになる。そこに伴う一種の諦めは、前後の事情を考慮に入れた諸般の条件の「了解」によって得られるものであろう。「和解」をもたらす「理性」とは、こうして各人に全体性のなかの位置づけを割り当てることによって、そこから社会的立場が規定されるような仕組みを作り出す。しかしみずからのアイデンティティを全体のなかの或るひとコマであることから授かる個人とは「……たとえそれが納得のうえでのことだとしても……匿名の権力の傘下で全体性による独裁的抑圧を被ることになる（TI/38）」。

つまりこの共通の理性によって等しく一同の者に把握されたシステム内では、各人はそこに所属してはじめて意義を与えられるわけである——組織の全体性に寄生したこれらポジションは、互いにとって了解済みで、そこに未知なるものはない。それゆえすべてはひとつの精神のもとに配置されているも同然なのだ——これが一方の引用で語られているところの「他者性の排除」ということである。しかし一切が周知の意義連関のもと理解されているとはいえ、このシステムにひとを組み込む否応なしの力は「匿名」の権力でもある——ひとは「つねにすでに（ハイデッガー）」そこに投げ入れられている自分を見いだし、しかもみずからの落ち着く場に従ってアイデンティティがあてがわれるのであるから、個々の独自性はいわば問題外の事柄となる。

系統立った意味の序列のなか、すべては既知の脈絡に足場を得ている。かといってそこから汲まれてくるのは社会で認知された枠組みに過ぎず、個々のかけがえのない人間性は取りこぼされている——このような全体性のもと営まれる関係において、ひとが疎外を感じるのは当然である⁽⁵⁾。秩序への万人の集約である「平和」は、こうして「理性」によって現実のものたらしめられる——だが「〈現実的なるもの〉は理性的であり、唯一

〈理性的なるもの〉のみが現実的である、と哲学とともに認識しつつなお……世界を変革しようと望む者たちの叫び声をかき消すことも封じることできないならば、それはすでに『集約』が包摂しえない意味の領域に足を踏み入れた、ということである (DD/126)。

体系のなかの位置づけによっては尽くされない意味とは、あるがままの個性性であった——そしておのれも他人もともにそのオリジナリティを相対性のうちに埋没させてしまう包括的システムに突如「弛み (AE/111)」を来たすものは、「それそのもので意味する (DD/244)」他人の「顔」なのである。それぞれを統合する秩序に収まっているかぎり、互いに役割を心得ているので、過剰に干渉し合わないことが暗黙のルールのようにになっている。守るべきはおのれの持ち場であり、争いを起こさないためには、言わずもがなのこの常識に従って共存するべきなのだ——かくして、世間一般では他人への「無関心」が主流を占めることとなる。「だが、何よりもまず問われなければならない——ご立派な心によって愛でられている〈理性〉なるものが打ち立てるこの和平は、実はそれに先立つ『他人への無関心の不可能性』の賜物ではないだろうか (DD/217)」——つまり、各人をおのが領分に留まらせ万事を丸く収める「理性」も、根源的にはその活力を憐憫から得ているというのだ。

何不自由なくこの社会の一員として暮らしを享受している者がひどく当惑させられるのは、自分がその一部である〈我々〉の規準から逸脱した人間を目にしてしまった時である。つつがなく日常生活を送るため通常自他ともに取り繕うのが当然とされている態度や流儀が、その人物の呈する野性によって揺るがされてしまうからだ——社会が要求する一人前の条件を満たしえないこれら苦境にある面々は「絶対的かつ執拗なものとして、無防備な眼の奥底から、裸形と悲惨のうちに立ち現れる (TI/218)」——そ

(5) これがハイデッガー存在論における「存在者である“誰か”との関係(倫理的関係)を存在者の存在との関係(知の関係)に従属させる (TI/36)」という事態のことを指しているのは言うまでもない。

して「この悲惨と飢えの感得が、〈他人〉との近親性を成就する (ibid.)」のだ。

同じ文化に帰属する者として認められるべく、ひとは一定の規範に従った立ち居振る舞いを身につける。こうして掟に通暁し合った仲間内では、団体精神の一体感を得られても、そこにありのままの人間を発見することは難しい——互いに分かり合える間柄でありながら、それはあくまでも社会的なコードを介した間接的な理解であるに過ぎず、自分も他人も真の意味では決して本性が明かされることのないこの関係は、かくして共鳴なき冷めたものなのである。それが「他人の顔を起点として覆される (DD/264)」——その際、自他を意味づける既知の境界線を突き破って迫りくる、この打ちひしがれた顔に心ならずも狼狽し、日常に安住することについての後ろめたさに苛まれることになる——「隣人の顔は、一切の自由な同意、一切の協定、一切の契約に先立つ振り切ることのできない責任を、私に対して意味する (AE/141)」。

2. 既知の世界を問い直す「身代わり」の目覚め

このように、捨て置けない他者を不意にまのあたりにして心苦しさを覚える時、日頃自己を律している無関心の作法を思わず忘れ、みずからに課せられた枠組みを飛び出している自分がある——身も世もない他人の窮状に応えるこの精神の動揺は、その圧倒的な力をもって、普段意識しているわがアイデンティティを踏み抜いてしまうからだ。乱心しつつ自分とは何たるかをめぐる既定の意味の制約から解かれるこの「自己」は、従って、無意味の深淵に滑り落ちる危険を冒す——「苦悩、すなわち無意味による意味の決壊は、(新たに)意味が無意味を凌駕するためであり、この(新たな)「意味」とは、他人のために身代わりになる同一者のことである (AE/105)」。

かくして他人への激しい哀切に駆られて救いの手を差し延べてしまう、この咄嗟に出る反応において、ひとはおのれの利益を中心とする日頃の殻

を破ることとなる——そして日常世界で維持している立場というものが、その他大勢と共有されたシステムのなかで占めるひとコマとしての意義に過ぎないのだから、ある瞬間そのコマを外れて無名の者となったところで、むしろ新たに自分本来の意味を取り戻す道が拓けることにつながるともいえるのだ⁽⁶⁾。それゆえこうして噴出する情動は、体当たりでみずからの意思を伝えるなかで、もはや共同体の間接的コードに拠らず、直接身をもってかけがえなき意味たらんとするようひとを導く。「……苦しみにおのれを供する感受性、それはみずから徴しを体現しつつ、意味する。存在の果てのこの身代わりは……徴しの贈与に行き着き、こうした徴しの贈与それ自体をも贈与してゆき、自己表出する (AE/31)」。

この、いわば自分を活かして他人を生かす、止むに止まれぬ援助は、かくして「身代わり」と呼ばれる——苦痛に歪む顔という寄る辺なき事態を支えてみずからを投げ出す際、ひとは自分自身をも苦しみに曝すことになる——見てはいけぬものを見てしまったら最後、背負い込まされた修羅場のヴィジョンに囚われ続け、以後わが使命はそれに翻弄されることを免れないからである。そしてそれは具体的には「与えること、すなわち他人のために（他人の代わりに）自己に反して存在すること……それは、おのが口からパンを引き剥がし、みずから断食することで飢えた他人を養うこと (AE/94)」というかたちで生起する「究極的自己供与 (AE/92)」なのだ。

しかしながら、このようにみずからを犠牲にした他者の救済は、自発的に志願して乗り出すことではないという。それは平穏な世に走った亀裂を垣間見てしまう不慮の事態ともいえるのであり、「傷を負わせる呼びかけ (AE/124)」なのだ。そういう意味では、この降って湧いた有責性への目

(6) それゆえ、体制内の一員としての意味を担う者とは対照的に「この『他人のために』は疎外を生じることがない (AE/181)」。無媒介かつ端的な意味である〈顔〉に打撃を受けた心もまた「コンテクストなき意味 (AE/146)」へと叩き出されて独自性に還るよう強いられる。

覚めはその起源が「どこにあるか分からない (AE/28)」命令から由来しているとしかいいようがない——それというのも、意表を突いていつからともなく襲うこの呼び覚ましは、またいつ終わるとも知れぬ性質のものだからである。

言わず語らずそれそのもので意味を発するとはいえ、〈顔〉は一瞬たりとも同じ形相を留めてはいない。それゆえそこに、たとえ奥底の悲痛なものがふと閃いたとしても、すぐさまそれはいつもの平静さに吸い込まれてゆく——これが哀れを引こうとて苦しみを誇示した顔ならば、惰性と化してもはや見る者の情に訴えかけることはないであろう。このように移ろいゆくものである〈顔〉は「自己の現れに臨在し、更新によってみずからのかたちを突き破る至高の現前であるとともに、すでにして一切の現前の失墜、現象以下のものでもある両義的形態 (AE/145)」なのだ。

このことは、〈顔〉に触発されて否応なく遣わされる保護の活動が、必然的に遅れを伴うという事態を意味している——なぜなら、その痛ましさに度肝を抜かれてこちらが立ち上がった時にはすでに、〈顔〉は別の様相を呈し、求められる救援はかくして常に若干時機を逸しているからである。需要と供給は厳密に噛み合うことが永遠になく、それゆえこの予兆もなしに示唆された責任は、果たし終えることがない——義務の完遂という満足を決してもたらさぬ「身代わり」は「不断の要請、不断の負い目、悔恨の繰り返し (AE/136)」という、底無しの過程に投げ込まれるのである。

他人を救う責務に覚醒してしまった者は、同時にその限度のなさに向き合わされて慄然とする——だが、こうして個々の苦しみをその身に敏感に感じ取り、みずから苦しみを余儀なくされる「身代わり」に付された者も、寝ても覚めてもこの責め苦に曝されたままのわけではない。それというのも、あのように移ろいやすい〈顔〉とてもやはり、それが由来するコンテクストを前後に連ねているからだ——ひとが存在する場合その状況から切り離されて単身この世に投げ入れられているということはありません——そこには独特の背景事情とともに彼の傍らに居合わせる人物がおのずと付

随する。そして周囲を取り巻くこれら事物や人物は、いきおい〈顔〉にその布置による意味づけを与えることになる——すると〈顔〉はその生々しさを、見慣れた平衡状態のうちに隠蔽してしまう。一切を連繋のなかのひとコマとして擁するこの平衡状態とは、例の「理性」によって維持された社会の調和のことであった。

こうして必然的に〈顔〉が巻き込む多数を相手とする以上、彼らを平等な者として扱うことがまっとうな社会生活では求められる——すると同時に、専ら〈顔〉に囚われた「身代わり」の仮借なさも和らげられることになる。このように、同一の尺度を万人に適用せんとする法や制度で支えられた社会は、個々の〈顔〉を一様な色で塗りつぶしそこに秘められた苦悩を覆い隠すものではあるが、それはまた、一挙にあまたの者の救済を可能にする効果的な装置でもある。そういう意味では、公正な社会とは、他人の不遇を際限なく気に懸ける「身代わり」の使命からいって積極的に志向される現実的ゴールなのである——そして「重要なのは、正義・社会・国家・諸制度といったすべての形態を、近親性を起点として再び見いだすことである（AE/248）」——つまり、世に複数の人間たちが存在しそこに集団が形成されているかぎり、〈顔〉がその痛々しい裂け目を明かすことは極めて稀なのだが、緊密に組まれた連関からときおり漏れるこの嘆きを絶えず感受できる態勢でいて、はじめて社会は是なるものだといえるのだ。

理性が繋ぎ留める平和なる状態とは、以上のように他人の痛みを打撃を受けて既存の意味を還元する「身代わり」によって要請され、点検され、正当なものとされる。しかしこの、おのれを一旦無意味に陥れるほどの激しい感応性は、ひとえに個々の人間の良心に懸かっている——自己の利益を中心に展開されている秩序の歪みを糾しようとするれば、それはひとが自分以外の者を弁護してみずからを下に置くことによつてのみだからだ——「マルクス主義は……不正な体制のもとでは、特権階級の人々でさえ隣人の窮状に対して痛みを搔き立てられずにいられないという道徳的反応

を、その力の根源としていた (DD/63)』。

こんにちまで改革を促してきた力には、確かにこうして目覚める利他的精神も大いに寄与してきたには違いない。だが実際には、ここに見られる「自己犠牲」とは正反対の契機が、社会の安定に貢献してきたと唱える文献学者がいる。ルネ・ジラルルの「身代わり」説をこれから検討していこうと思う。

3. 生贄による秩序の確立——ジラルルの場合——

(1) 共同体の危機と平和へのプロセス

およそ世界中の神話と儀式および迫害文献を渉猟したジラルルは、「人間文化の単一性 (VS/448)」を突き止めた——それは「人々が第三者を犠牲にしたうえでしか絶対に協調できない (VS/386)」ということである。つまり或る特定の者を村八分にし、その追放を図ることによって共同体の統一をもたらすメカニズムが、古今東西の文化形成に見られる普遍的な現象だというのだ。しかも社会の辿るこうしたサディスティックな過程は、意識的に追求されてのことではなく、極めて自然発生的な和解への途上において生じるのだともいわれている。だとすれば、ここに伴う暴力とは、集団生活につきものである何らかのトラブルの解決策を提供しているのだろうか。それにしても、なぜこのようなかたちで一致団結しなければならないのか——そこに至るにはまず、共同体を支える秩序の疲弊が限界に達しているという条件が潜んでいる、とジラルルは言う。

レヴィナスとともに社会の成り立ちを観察した際、それはひとつの精神を備えた有機体であるかのような様相を呈していた——そこにおいて個々の成員は、勢力関係を反映した分布図に従って配置され、それぞれに相応しいとされた社会的地位を占めることによって秩序の統合を実現するのであった。こうして編成された綿密な序列は、階級の上下を必然的に作り出し成員間の差異を明らかにする一方で、「文化的な行動をわがものとしつつ自分の属する文化に正しく組み込まれるためには、高度の無意識的な模

倣なしで済ませることは誰にも不可能なのだ (DC/314)」。

このようにひとのアイデンティティが、明確に区切られた位置づけによって規定されるものでありながら、社会的に認知された行動の習慣化とともに、万人の同一化が次第に生じてくることになる——そしてこうした習俗の確立が文化形成につながっていくわけなのだが、この過程でひとは互いに横並びな存在だと感じるようになってくる。しかも制度というものは、時が経つにつれ膠着状態をもたらすこと必至なのであり、日々変化する力関係はこの枠組みをいつしか軽んじて、実力と実力が張り合う方向へと社会を誘引していく。こうなると、もはや競合関係に歯止めが利かなくなる——人々に同一の行動様式を強いる一定の文化内では、かくして相争う面々が本意ながらも互いに似通ってくる結果となり、これら紛糾した関係のなかでは究極的に彼らの欲望の向かうところまで一点に収斂されていくのだという——「主体は、競争者がそれを欲望するがゆえにその対象を欲望するのである。競争相手があれこれの対象を欲望することによって、主体に、望ましいものとしてその対象を指示するのである (VS/216-217)」。

共存あるところ習慣と制度が生まれ、それは必然的に模倣と緊張を引き起こす——そしてこの飽和状態がついに破れて競争の気運が高まってくると、同じ方向を目指す欲望の数々は牙を鳴らし合い、充滿した敵意で社会は窒息せんばかりとなる——ここにレヴィナスいうところの〈顔〉が啓示されれば、ぐらついた秩序も惨事を招くことなく安定を取り戻すのだろうか、実際は逆であったという。つまり、敵意を持って余した共同体は、その捌け口を求めて任意の人物を槍玉に挙げ、彼を殺害することによって相互の怨恨の解消を図ってきたのだった。

通常の支配機構がマヒして人間関係が行き詰まりを見せるこうした社会的危機は、無差別にひとが死んでいく疫病や自然災害などによっても起こりうる——そしてそこから脱出する方策として、やはり同様に生贄の殺害が志向されるという。「事実、真の原因がどのようなものであれ、危機に

見舞われた者たちからすれば、大がかりな集团的迫害の引き金となる危機は、いつでもほぼ同じような仕方経験されているのである。彼らにとって最も強烈な印象を与えることがらとは、社会的なものそれ自体の根底的な消失、文化の秩序を決定する規準や〈差異〉の終焉であるという点で常に変わらない（BE/22）。

従って、原因を問わず制度の衰退という避けられない事態に直面した人々が、こうした混乱のなか鬱積したエネルギーのやり場を渴望して一触即発となるのが常なのだ——そしてこの本来特定の対象なき敵愾心の餌食となるのが、「身代わり」の犠牲者なのである。しかし憎悪の向けどころと目されるからには、ここで血祭りに上げられる者は社会の危機の元凶であると「信じられている」⁽⁷⁾——「最初はまったくの偶然によるか、生贄たりうる何らかのしるしによって正当化されるかして、集中攻撃の口火が切られさえすれば十分なのだ。或る潜在的な標的が他のものよりもほんのわずかに人目を引くならば、それだけで、全員は反論の余地なき確信と、和解をもたらす至福の満場一致に向かって、一挙になだれ込んでいく（BE/127-128）」。

それゆえ人々の怨念を一身に集める「身代わり」の敵とは、全員が認めさえすれば途端にでっち上げられる根拠なき罪を負うものであるが、まさにここで生じる「合意」こそが新たに秩序を回復する転機となりうるのだという。しかも彼ら迫害者は、何と逆に自分たち自身が被害者だとまで思

(7) しかし被迫害者の選択にあたってまったく基準がないわけではなく、秩序の崩壊という危機の経験は社会にとって「眠っていた偏見が呼び覚まされる（BE/12）」きっかけとなる。それは、従来の共同体から見て一般人の条件を外れる者が攻撃の矢面に立たされがちであることを意味している——民族的・宗教的マイノリティや不具者、及びそれまでの特権階級など、平均的なレベルより上であっても下であってもそれらの人々は「体系内の異常」と見做される。そして社会の主流に属さぬ彼らは「……体系の真実——それが相対的で脆弱であり、いずれ死滅する運命にあること——を示唆するがゆえに、恐怖を引き起こす（BE/34）」のである。こうして社会のタガがゆるみ始めた時、彼らが民衆のいわれなき憎しみをかう条件が整えられてしまうのだ。

い込んでいるのだ——なぜなら、自分たちは目下の無秩序の原因たる例の者の影響を被ったがゆえに困難を強いられているのだから、苦しめるこの「社会の敵」を征伐しなければ我々が救われることはない、というわけである。こうした共通の被害者意識のもと、そのじつ迫害者たちは、良心の咎めを感じるどころか大義名分を掲げつつ集団暴力へと導かれていく。そしてこのように一致して事に当たる過程で、再び活気づいた共同体にめでたく統一が果たされることとなる。かくして人々のあいだには和解が成立し、正気に帰ったこの社会は、生贄がもたらした絶大なる沈静効果に改めて感じ入るのである——そのうえそれを今後の平和復興の手段として役立てるべく、その記憶を代々に渡って継承していく必要性を認識した——これが儀礼の発端である。

(2) 儀礼という社会統合の装置——供犠を中心として——

以上のように、言いがかりをつけられ吊上げられた生贄は、共同体が丸丸となって暴力を働くきっかけを与え、失われた調和を取り戻すことに貢献したのであった。この「基礎づくりのリンチ (DC/114)」に味をしめた面々が、敵対から平和に至るこうした一連の出来事を、われらが文化の起源を印すものとしてかたちに留めておこうとした所産が神話と儀礼なのだという——「もし現実的な起源が存在し、もし神話がそれなりに絶えずその起源を想起し、もし儀礼がそれなりに絶えずその起源を記念するとなれば……人間に強烈な印象を与えた或る出来事が問題であるにちがいない (VS/139)」。

だが他方で、文化の基礎を築いたこの集団暴力の表象は、時代が下るにつれ修正に修正が重ねられ、ついには神話から消し去られるという過程を経ることがジラルールの調査によって判明した⁽⁸⁾。それと同時に、儀礼においても次第に供犠の影が薄くなり、こんにち共同体の一体感のみを陽気に演出する「祭」が優勢となりつつある。みずからの野蛮さから目を背けたい人間本性が、社会のこうした残酷な起源を隠蔽する傾向を促進するので

あるが、その結果ここに伴う無自覚さこそが、かの統一原理からひとを脱却させるのを困難にしている、とジラルは指摘する。

法体系によって個人的な復讐の独占権が握られている以上、もはや誰かを生贄とする社会の浄化装置があからさまに機能することはありえないように思われる。しかし今やこうして鍵をかけられたかのような例の団結のメカニズムは、明確に意識されることがないために、むしろ疑う余地のない正当な志向として繰り返される運命にあるのだ——冷戦終結以降、アメリカによる対外的な軍事行動が、自国の政策にとって不都合な者を標的とするリンチ型戦争の趣をますます色濃くしている点からも⁽⁹⁾、生贄を介した平定のメカニズムが人類にとって癒し難い衝動であることが窺われる。従って、この「基礎づくりのリンチ」の本質について無知なままであれば、以後も社会は極めて自然な展開として排除の暴力を温存しつづけるであろうとジラルは予測する。

それゆえ現在の我々にとって必要なのは、改めて各文化の基底に存在する犠牲の仕組みに目を向けてみることである——そしてこの「創始的暴力 (VS/386)」を再現する儀礼のなかで、供犠が果たしてきた役割を知ることである。「……文化におけるあらゆる真の決定は、供犠としての性格を持つ（繰り返すことになるが、ラテン語の決定する *decidere* という動詞には、生贄の喉を切るという意味がある）(BE/169)」と強調しつつ、ジラルは生贄をめぐる構築される秩序が儀礼において更新される意義を語る——時が経つにつれ内的緊張を募らせていく共同体が、相互暴力の泥沼を予防するため、ある一定期間を置いて生贄の殺害を含む儀式を執り行なう——今やこの生贄は、原初のそれに代わる動物であったりするのだが、

(8) ギリシア神話、北欧神話、アステカ神話を例として取り上げ、文化の基底にある殺人の隠蔽がそこできかに巧みに施されているかを検証した *Le Bouc émissaire*, pp. 87-139 を参照のこと。神話に潜むこの迫害の原型は *La Violence et le Sacré* の第3章、オイディプス王を扱ったくだりでも詳細に論じられている。

(9) 鈴木透『性と暴力のアメリカ』中央公論新社、2006年、211-228頁参照。

こうしてかたちばかりでも、かつての満場一致の記憶を再び共有することによって、不和を和合に転じる策として供犠は維持されていったのであった。

かくして儀礼で奮われる暴力は、共同体の成員間に敵を生じさせず、彼らの攻撃的性向はすべて報復の怖れない生贄に注がれるのである——社会の安定に向けて暴力を外側に遠ざけておくこの知恵は「内部の平穏を不滅にするための永続的戦争（VS/418）」とも呼ばれており、それはこんなお頻繁に耳にするフレーズを思わせるものである。この、愚かでおぞましい必然性に導かれていく誘惑を断ち切るために、我々は目覚めなければいけないのだ——人間が、おのれの鬱憤を晴らすためにはどうしようもなく「敵」を必要とするということに——日常生活を営むなかで、小さな妥協や譲歩の蓄積がやがて社会のそこかしこで膨れあがり、反感と不満というこの毒ガスを外へと排出するために、罪悪感なく「悪者」を仕立ててしまえるこの人間本性に。こうした目覚めの果てに、初めて〈顔〉が啓示される態勢が整うのではないか。

共同体に充満した敵意を身代わりの部外者へと逸らし、その結果得られるものは「注意深く秩序立った平穏（VS/399）」であった——これはレヴィナスいうところの「平和」と同じ状態を指している。従って、いずれの「身代わり」を介してであれ、行き着くべき共存のかたちは同様なのだ。また、両者とも、迫害にまつわる敵意の出所が特定しえないものだと述べている点でも共通している——或る日ふと〈顔〉に触発されて後ろめたさに捕らわれてしまった主体は、安泰なるおのが日常を問い質され、みずからを投げ打つことを余儀なくされる——そしてこの責め苛む強迫の力は、いつからともなく襲ってくる、起源なきものであった。

他方、共生に伴うルサンチマンも、そこはかたなくたぎっていたものがいつしかその放逐を求めて集結していくなかで、明確な標的を目指すようになったのであった——社会に累積していた正体なき敵意が、次第にかた

ちを成してついに「敵」を発見するに至るのは、ひとえに満場一致という高揚感の為せる業なのである。ジラールは、社会が積極的に志向するこの一体感のいかがわしさを警告するくんだり、レヴィナスによるタルムード注解に言及しつつ、次のように語っている——「この（ユダヤの）習慣律によれば、どんな被告も、裁判官たちが全員一致で不利な判決を下したならば、すぐに釈放されることになっています。全員が一致して告発するということは、それだけでも胡散臭い、というわけです！ それは被告が無実であることを暗示している、というわけです（DC/466）」。

今や、ジラールが断罪しつつ焦点を当ててみせる秩序形成のからくりも、レヴィナスの所説と齟齬を来たすことなく併存しうるものであることが明らかとなった——いずれにせよ、求められているのは適度な均衡のもと治められた平穏な社会である。そして「敵意」の起源はとらえどころのないものである、ということも両者の唱えるところであった——そうした真理から、ジラールが導き出したのは「敵」と「犠牲者」の任意なる性格である。すなわち、「敵」は満場一致の勢いによって捏造されうるのであり、また、迫害者たちはみずからが被害者だという意識において結託するのが常であるから、「犠牲者」とは視点のありかによって誰とでもいいうるということが説き明かされた。

レヴィナスとジラルールの相違点はといえば、実際に現実を稼働させてきた仕組みに力点を置くかどうか、というところである。「国民は、一体としてのみ革命の主体でありうるのだ」¹⁰⁾という主義を掲げたナチスの国是によって殆どの親族を奪われたレヴィナスが、ジラルールの生贄説に異議を唱えるはずはない。この酷い真実を十分認識したうえでなお、レヴィナスが人間の良心に望みを託すのは、彼が理性を信じているがゆえであろう——例の生贄のメカニズムは、ひとがその働きを「知る」ことによっては

10) 池田浩士『虚構のナチズム』人文書院、2004年、74頁。

じめて自然な流れに呑み込まれず踏みとどまることが可能になるのであったが、こうして自然に逆らって啓蒙の力を授かることができるかどうかは、ひとえに理性の働きにかかっている。そしてこの「理性」による自覚と自制心こそが、〈顔〉が閃く条件を支える地盤なのであろう。

だが、万事を調和のうちに纏めあげる「理性」は、そもそもその尽きない活力を憐憫から汲んでくるのではなかったか。また、ひとがおのれの残忍さに目覚めてはじめて〈顔〉から衝撃を受けるというのならば、この世はとっくに終わっていたのではないか——いっさいを破滅に至らせるほどの戦乱を幾度もくぐり抜け、なお世界がこんにちまで持ちこたえているのは、あの身も蓋もない生贄のメカニズムの合間には〈顔〉がひとの心に訴えかけ、世を決定的な破局から救ってきたからではなからうか——そして世代が移り変わるごとに〈顔〉が起点となった改革の記憶も薄れ、やがてまた沈滞した空気の中か闘争心が高まっては生贄を求める、ということの繰り返しによって、歴史が織り成されてきたのではなからうか。

ここで現実と理想との関係をめぐって、我々は立往生してしまう——なぜなら、レヴィナスの「平和」観にはいささかも希望観測的なところがなく専ら現実主義的であったのに対し、それを維持する契機とされた「身代わり」は人間性善説を頼みの綱としているところが否めないからだ。果たしてレヴィナスの平和に関するリアリズムとは、どの程度現実の分析に基づいた理論展開だといえるのだろうか——最後にそれを、藤原帰一の考察に照らして検討してみたい。

4. 抑止戦略から「正しい」平和へ

——国際政治の倫理化に伴う敵と味方の二分法——

核兵器が開発された後なおも全世界が破滅の危機に陥らずに済んだのは、「敵国」を憐んで核保有国がその使用を思いとどまったからではない。米ソ冷戦の間、一方が攻撃を仕掛けてきたら確実に反撃を加えると事前に予告することによって、相手の軍事行動を牽制に導く「抑止戦略」が功を奏

したおかげで、世界は辛うじて大戦争を免れてきたのである。こうした相互の威嚇による「力の平和」においては、相手の先制攻撃の意志を挫くために軍事力の優位を競い合うことが求められる——報復で自国が被る最悪の事態を恐れさせるには、相手側との力の差を思い知らせる必要があるからだ。このように軍拡競争に明け暮れながらも、いったん戦闘の糸口を開いてしまえば、もはや收拾のつかない壊滅状態が広がっていくことが米ソ両陣営にとって自明であった——核で脅しつつも互いに戦争を避けてきたのは、みずからの権益の一切が元も子もなく水泡に帰すこの可能性ゆえだったといえるだろう。

抑止効果によって辛うじて保たれてきたこの力の均衡をも「平和」と呼びうるならば、それは「要するに戦争が行われていないという状態に過ぎない」¹¹⁾。そして国際政治におけるリアリズムに視座を据えた平和観は、各国がおのれの利得と保全を第一に掲げつつ侵犯に備えて武装するのを前提に展開されている——「このようにいえば、不用意に戦争を肯定する立場のように聞こえるかも知れない。だが、リアリズムとは、決して無限に戦争を肯定する考え方ではない。それどころか、戦争が国際政治における現実にはかならないからこそ、その現実を冷静に見つめながら、なお戦争に訴えることなく秩序を保ち、国益を増進する方法を考えるのがリアリズムの真髄だったといってよい」¹²⁾。

つまりリアリズムに従った「平和」とは、いささかもユートピア的な発想を併せ持たない代わりに、それが実現不可能な夢だとも考えない——なまじ「平和」に過大な期待をかけて理想郷の建設などに狂奔したりすれば、むしろその運動に加わらない者に対する暴力を生む原因ともなる。いつ対立してもおかしくない、互いに自国本位の国々のあいだでそれでも共存の合意が成り立っているいつきの状態、これを「平和」と定義するならば、それはごく当たり前の日常を指している観念であることが分かる。このよ

(11) 藤原婦一『平和のリアリズム』岩波書店、2004年、序VI頁。

(12) 同上、序XIV頁。

うに本来敷居の低いものである「平和」とは、それさえあれば人間生活のすべてを満たしている十全な条件だというわけではなく「いわば政治社会の出発点に過ぎないのであって、それだけでは市民的自由も豊かな生活も保障されることはない」⁽¹³⁾のである。

かくして、ヒトがヒトとしてまともな生活を営むにあたっての初めの一步を築くに過ぎない「平和」は、極めて慎ましやかな要求であるにもかかわらず、それを確かなものにする国際秩序の形成に関して各国は消極的であるのが常であったという——それというのも、おのが利益を原動力とする国策を二の次にしてまで国際協調に打ち込むという姿勢は、国家の習性からいってその本質に反することだからだ。ところが、逆説的にも、こうした自国中心路線が破られる異例の空気を醸し出したのが戦争とその結果だったのだ——「今日の国際政治において、何らかの形で動いている国際組織とか、非公式の国際体制のほとんどは、第一次大戦か第二次大戦をきっかけに実現した。……世界戦争を契機に国際組織がつけられるのは偶然ではない。どの国家も、国際協調より自国の国益を優先する限り、国際組織の設立に各国が同意することは難しい。そして、世界戦争の終結期は、国際組織の設立と秩序形成に大国が同意する、きわめて例外的な時代である。巨大な戦争でもない限り、犠牲を払ってでも国際協調を国益遂行に優先する必要は生まれえないからにほかならない」⁽¹⁴⁾。

利他的精神などとはおよそ相入れない、国際関係をめぐるこの世知辛い現実において諸国の連携を促してきたのは、世界戦争の惨禍から学んだ教訓だった——そして冷戦の終焉までは、核の脅威で相互抑止が余儀なくされていたため、従来の関係の枠組みを基本的には尊重する方針がとられていたのであるが、ソ連の崩壊によってそれは大きな転機を迎えることとなった。今や、核戦争による世界全滅の可能性からは解放されたものの、なしくずしに終わったこの冷戦は、国際社会にとって抑止戦略に代わる新た

(13) 同上、序Ⅶ頁。

(14) 同上、47頁。

な連帯のかたちを築く機会を失わせたという——「単なる権力関係ではない、より制度的な平和維持の機構⁽¹⁵⁾をつくる代わりに、国際政治の現状を変えれば混乱しか生まれないという、現状変更への恐怖のみによって支えられた、戦争のない『状態』が保たれた」⁽¹⁶⁾。ここに至って、専らアメリカの覇権が幅を利かせる時代が到来したのである。

抑止の縛りから解かれた米軍は、持てる力を遺憾なく発揮できる機会に恵まれることとなった——折しも、世界は現状変更に対して逃げ腰である。この、旧来の体制が形骸化し対抗勢力が空白となった状況に付け込むようにして、米国はおのれの理念実現に向けた秩序構築のための戦争という新機軸を打ち出していった。その際、排除の対象となる基準はその国家の政権が独裁や人権抑圧などデモクラシーの掟に背く行為を繰り返し、世界秩序の足並みを乱す可能性が疑われるか否かだという——そして「『戦争を起こすような国家』の体制が変わること、それも中から変わらないときには外から介入してでも『変える』ことが国際平和のためには必要だ、という判断がここから生まれる」⁽¹⁷⁾ことになる。これは、世界平和の名のもとに、みずからの取り締まりの暴力のみを正当化する米軍が「警察のように兵隊を使うことのできる条件」⁽¹⁸⁾が整ったということの意味している。

この警察化した軍事行動がすべての国家を導いていこうと躍起になっているのは、人権思想の普及と高揚に向けてである——つまり今や「正しい平和」が各国に強いられる「国際政治の倫理化」⁽¹⁹⁾が、抑止戦略後の主流

(15) そのための具体策として藤原が提言しているのは、大国の意図に左右される安全保障理事会でなく、国連総会の決議によって指示を出しうる平和維持活動のための常設機関を樹立することである。そうした新機関のもと、従来の軍事訓練とは異なった紛争処理の技術と知識を備えた要員を育成するのが目的である。彼らが送り出された先で従事する活動は紛争後選挙の監視や和平合意策定への協力などさまざまな分野に亘るが、詳細は大芝亮・藤原帰一・山田哲也編『平和政策』有斐閣、2006年、227-265頁を参照のこと。

(16) 藤原前掲書、48頁。

(17) 同上、124頁。

(18) 同上、149頁。

となりつつあるのだ。しかも冷戦後、国際人道法が内乱平定に適用されるという事例が相次ぎ、人権保障は内政不干涉原則を越えた普遍的規範との考え方が各国で定着するに及んだ。

人権擁護や民主政治に加えて、国際社会の真実な一員として迎えられようかどうかの試金石は、その国における「戦争の記憶の仕方」だという——つまりかつて侵略や虐殺などの対外政策を取った国が、現在更生して世界の安定に参加しうる存在だと認められるためには、その社会の成員がおのれの挑発行為について「正しく」記憶しているかどうか問われているのだ——それというのも、その反省をもとに将来の戦争を思いとどまらせる効果が期待されているからである。そしてここで生じる問題とは、国民のあいだで共有されている記憶と国外から求められる記憶との食い違いなのだ——「日本の犠牲者ばかりを語る戦争の記憶とは、国外の目には、犠牲者史観に過ぎず、悪くすれば加害行為を忘却し、戦争責任を棚上げにする便法のようにさえ映ってしまう」²⁰。

だが、武力でその方向が決定されてきた歴史の流れのうち、どの虐殺事件が無法国家の再発防止として記憶に留められるべき対象となるのかについては、第二次大戦の勝者の論理に委ねられている節もある——アメリカは、みずからの軍事行動による被害者に関しては過小評価しがちであった。藤原は「アメリカでも日本でも、『われわれ』の側の犠牲者には、人間の顔が与えられた」²¹ことを指摘し、敵と味方の二分法の克服は、結局相手の人間性に目覚めることに尽きるのだと力説する——「他者のなかに人間の顔を発見し、自分たちとの違いが当たり前ではなくなったとき、二分法の前提は崩れてしまう。そのとき初めて、正義の呼びかけの陰に隠された偏見と独善も自覚されるのだろう」²²——こうして、こんにちの外交政策

(19) 同上、127頁。

(20) 同上、132頁。

(21) 同上、214頁。

(22) 同上、215頁。

の行き詰まりとその打開への道が明かされた時点で、我々はまたしてもレヴィナスの課題に送り返されてしまった。

おわりに

無情なる駆け引きと折衝が繰り返され、談判決裂の際には戦争さえも辞さない外交関係にこの先歯止めがありうるとすれば、それは敵対者に〈顔〉を認める余地が残されているかどうかにかかっている。だがそうした心境に至りうるには、まず敵意というものが得体の知れない根源に由来することを、誰もが承知していなければならない——しかも「わが同胞」の一体感を高めるために共同体は「敵」を求めるものだという事実、我々が気づいていなければならない。しかし、この世が相も変わらず異分子の排除によって団結を図り、われらが犠牲者の顕彰にのみ終始しているかぎり、「敵」が生々しい相貌をもって我々の心情に迫ってくることは極めて稀であろう。そしてマスメディアで流される戦場の模様も、自国本位の視点から報道されるものであるがゆえに、「敵」の惨状は隠蔽されそこに思わず虚を衝かれるような〈顔〉を発見することは難しい。そういう意味では、レヴィナスの「身代わり」は要請されるものではありながら、あくまでも期待の域を出ないものだといえる。

ここで思い出されるのは、平和教育の惰性化とその再生の過程を描いた『平和は「退屈」ですか』という実録である——こんにちの若者が、元ひめゆり学徒の語る戦争体験に関心を示さず「言葉がここに届かない！」²³と発言する者まで出るに及ぶなか、自分たちがその負の遺産をどのようにして受け継いでいけるか、という問題意識を持った十代の人間17人が、自主的な勉強会をつくった——そこで元ひめゆり学徒隊の人々と交流を重ねるうち、一方的に価値が説かれるだけだった従来からの平和学習とは異なる「心の共鳴作用」を得るに至って、それぞれが自分にとっての平和

23 下嶋哲朗『平和は「退屈」ですか』岩波書店、2006年、3頁。

の意味を見いだしていく——こうした展開を経る若者たちの成長記でもあるこの本は、何よりも「平和への手がかり」を我々に示唆してくれる点で大きな意義を持つ。

世代の違いによる壁に阻まれ、なかなか打ち解けられなかった彼らが心の接点を持つきっかけとなったのは、ひめゆりの人々に当時の学園生活の個人的な思い出を語ってもらったことだった——こうしていわゆる「ひめゆり学徒隊」という集合的な存在としてでなく、個々の内面に触れてはじめて若者たちは彼女らの体験を身をもって聴くことができるようになる。つまりそれまでどこか他人事だった修羅場が身近なこととして迫ってきたのは、聞き覚えのある戦争体験の奥から個人の生き生きとした顔が覗いた時だったのである²⁴。それを機に、若者らはかつての少女たちの苦しみをおのれに重ねあわせる心情を養い、それはやがて平和をめぐる知識の渴望へとつながっていく。血肉を備えたひとを通して戦争の惨禍を感得したならば、次に自分が平和のために何をなするか、自問せざるをえなくなるからである。

この「虹の会」の若者たちは、平和を目指す心の芽生えが、他人の苦しみへの感受性に起因していることを物語っている——これは結局あの、レヴィナスいうところの「身代わり」で経験される打撃のことではないか。だとすれば、平和構築への意志も、ここから生じてくるということになる。レヴィナスの「身代わり」は、一見世界に何ら働く場を得ることがないかのようである。しかし各人におけるその心の「瞬き (AE/238)」こそが、明日の世界に救いをもたらす鍵なのだ。

²⁴ 元ひめゆり学徒たちは、戦争を食い止められなかった日本人の一員としてみずからの加害者責任にも自覚的であるという。下嶋前掲書149-153頁参照。

註

レヴィナスとジラルルの著作からの引用略号は以下の通りである。

* Emmanuel Lévinas

TI: *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité* (1961), Le Livre de Poche 1992.

AE: *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence* (1974), Le Livre de Poche 1990.

DD: *De Dieu qui vient à l'idée* (1982), Vrin 1992.

* René Girard

VS: *La Violence et le Sacré* (1972), Hachette Littératures, 1998.

DC: *Des choses cachées depuis la fondation du monde*, Grasset, 1978.

BE: *Le Bouc émissaire* (1982), Le Livre de Poche 2005.

Summary

Théorie de la paix chez Lévinas

— autour de l'ordre et voie vers sa réforme —

Miyoshi IWAI

Emmanuel Lévinas, philosophe juif qui a survécu à l'Holocauste, affirme que la paix partage son essence avec la guerre au sens où, dans chacune de ces deux situations, l'important pour chaque ennemi est de s'assurer de sa position et de ses droits. Il va toutefois sans dire que, plutôt que d'entrer en guerre, il est bien plus désirable pour des États ennemis de concilier leurs intérêts que d'entrer en conflit.

Pour que des influences rivales disparaissent et qu'un équilibre des forces resurgisse, il faut trouver une raison qui fasse découvrir un terrain d'entente pour en arriver à un compromis. Un différend ainsi réglé est appelé "paix" et il s'accompagne nécessairement de concessions.

Mais un régime établi au moyen du processus mentionné ci-dessus ne peut être établi sans tenir compte d'autres mécanismes moins favorables puisqu'une société comprend toujours une minorité dont l'intérêt a tendance à être négligé au profit du plus grand nombre de ses citoyens. Par conséquent, on doit réveiller sa conscience en la poussant à prendre soin de ceux qui vivent dans des conditions défavorables afin, tout d'abord d'aider ce groupe de mécontents à remédier à leurs difficultés, ensuite de maintenir un ordre juste qui ne risque pas de faire naître une révolte.

Pourtant, un des critiques, René Girard, dit que ce qui se passe est contraire à l'affirmation de Lévinas: d'après son interprétation d'archives et de documents universellement reconnus, pendant longtemps ce fut la coutume pour les êtres humains de chercher à se mettre d'accord en expulsant les éléments hétérogènes de leur communauté. Face à cette constatation qui expose la cruauté humaine, on conçoit que Lévinas espère jusqu'au bout en la raison humaine qui dépend de la sensibilité à la souffrance d'autrui.